



産経新聞

「我一人腹を切て、万民を助くべし。(中略)我一人腹を切て、諸人之命を助けおくべし」。大久保彦左衛門の『三河物語』に引用された徳川家康の言葉は、現代人へのさりげない

歴史の交差点

フジテレビ特任顧問 山内昌之



論しともなっている。家康は、天下人秀吉から上洛と臣従を求められ、もし自分が上方に行かなければ大規模な合戦が起きて、多くの人々も命を落とすと考えた。仮に自分が凶

は、都議会選挙の結果不振や国会答弁の不手際、党勢の伸び悩みと統率力の欠如に彼女たちなりの責任を痛感したからだろう。ただ、辞任が「万民」(国民)のために、彼らの「命」(生活)を揺るぎなくす

徳川家康の搗粉木

すりこぎ

るための政治行為だとすれば、遅きに失したかに見えるタイミングやその辞任理由が国民を納得させるのに十分かなど、政治家として未来につながる説明は不可欠であろう。家康には有名な自画像がある。三方ヶ原の戦いで武田信玄に屈し御家が存亡の危機に立たされたとき、万事休した洗面姿の肖像、鬘像を絵師に描かせたのである。完膚なきまでに敵にたたきのめされて窮地にあった自らの姿を後世の戒めとしたの

したのである。浜松城を無視して西上する信玄に野戦で挑むことで意地を見せ、負けて城に戻っても門を開けて奇策ありやと警戒させた。政治家は、負けても後に続く何かを模索しなくてはならない。家康が好んだ言葉に、老子の「大国を治むるは小鮮を烹るが如し」という金言がある(『東照宮御実紀』付録)。小魚は鱗などを取らず、つつき回さず料理する。政治も細かな点まで手を加えたり、干渉したりするのは、リーダーにとっても国民にとっても幸せとは思えない。この間の政府と野党、マスメディアに共通する問題点である。(やまうち まさゆき)

だ。家康の政治家や武将としての器の大きさに驚くほかない。順風満帆のときにリーダーは何もしなくてもよい。しかし、逆風や非難の嵐が襲々となるときには真価が試される。家康は逆境で常人の及ばぬ器量を発揮